

令和4年6月1日発行 春燈/第77巻第6号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

春燈

2022 June

6月号



安住敦の句

生くることしんじつつわびし熊を見る

『まづしき饗宴』昭和十五年

大分以前 登別（北海道）の熊牧場で罷の放牧をみたことがある。熊たちは立ち上がり掌を合わせてクツキーをねだっていた。動かぬ熊に誰かが「あれは年寄ね」と呟いた。師の句は熊をいっさい説明していない、それでいて無限の悲しさがある。それは人間を含めた生きものの全般の「生」に具わった哀れとみなされたのであろうか。佗しさを熊とわかť師のやさしさを感じる。

諸岡孝子

安住敦の句

万愚節人信ぜねば生きられず

『柿の木坂雑唱以降』平成二年

春燈創刊号は、昭和二十年十二月の降誕祭に刷り上がった。まさに俳句復興の希望の光である。

不屈の精神で、春燈の抒情を守り抜いて下さった安住先生の、弱さを知りえたからこそ見えてきた、晩年の万愚節の心のつぶやきである。御自身への、あわれみの賛歌である。

荒井慈

名誉主宰 安立公彦

主宰 鈴木直充

散り初むる紅梅とほき晩鐘に

唐桃の花仰ぎゐるゆたけき日

四囲ほのと夕映まとふ花杏

花杏わが身いつまで病みゐるや

近付けば数多の息吹朝ざくら



山々の座の定まれるきぎすかな

まんさくの空に一朵の雲も無し

土蔵よりいにしへの香や雪柳

雲が雨はらんでゐたる桜かな

靴箱に古き靴だけ亀鳴けり

燈下集



○ 片桐てい女

しみじみと紫雲英の花と寝起きせし

関西勢優位センバツ球春譜

一反歩用の紫雲英の余り種捨て時く

一反歩用の紫雲英の捨て種三角州

登校の昭和初めの春の風

○ 西川保子

吉兆かと初蝶の白眩しみぬ

空つぼの厩舎へついと初燕

煙突の残りし空をいかのぼり

飴炊の諸子やあふみ眼裏に

雨らしき雨の音なり桜餅

○ 佐藤信子

初蝶やまだ濡れてゐる空の色

ひとり言にひとり頷く日永かな

山門に隔つ濁世や花曇

春昼や方丈さまの膝の猫

人の世に絶えぬ戦や鳥雲に

○ 園部路郷

かまくらに座敷童の来てをりぬ

狐火を見し人なかに大囲炉裏

兎の尾耳当てにしてまたぎの児

救助隊標の紐きつく結ふ

魚は氷に上りて独り芝居かな

○ 松橋利雄

氏素姓ただす古系図鳥曇
稀に聴く春雷遠し奈良井宿
園児らの曲がる町角初桜
鶴折るや桜隠しの湯治宿
前向きに生きよと雲雀揚がりけり

○ 橘正義

さんしゆゆと共に日の出の空気吸ふ
早春といふひびきにも惹かれけり
紅梅にいつも小鳥が来てをりぬ
家々の春灯つぎつぎ家路かな
春灯や献立未だきめられず

○ 三上程子

待つといふ恋の美学や牡丹の芽
春の泥雀のかほを汚しけり
青き踏むあそび心をポケットに
かきあぐる白髪山の笑ひけり
さくら満ち一夜かぎりのコンサート

○ 中野あぐり

墓守としばらく話す春焚火
母の忌より父の忌遠し土筆煮る
大仏の半眼天地芽吹きけり
逃水や遠くを睨む鬼瓦
人声や肌の曇りし今年竹

○ 鷹崎由未子

海見ゆる窓全開やミモザ風
陽炎や旅立つまでの旅ごころ
うららかや余分なものに囲まれて
野を焼くやその夜の酒は辛口に
ふらここに己が意固地をゆらしけり

○ 松本峰春

北窓を開けるも答かへりこず
葱坊主の背丈のどれも似たりよつたり
蛇の衣干されぬてまだ湿り残る
筍を土ごと貰ふ袋ごと
一日中の風と雨牡丹をよるこばす

○ 木村傘休

校長室の窓辺明るしチューリップ
棟上げを祝ぐ切幣の風光る
夕風のしみる灯影や糸桜
野阜の夜風を灯す桜かな
夜桜や緑酒の寮歌遠く聞き

○ 加藤良子

啓蟄や這ひ這ひの児の輝く目
テーブルを掴み叩く児風光る
ころぶなと別れの言葉山笑ふ
真つ白な運動靴や一年生
デーケアで桜見物車椅子

○ 近藤牧男

雑巾とバケツ positioning 日永かな
触合へば太古の音の蜩かな
すみれ一束雲にくるみて贈りたし
相似たる句柄人柄桃の花
日光連山一番遅く笑ひけり

○ 平沢恵子

燕来る街円相にひろごれり
黄水仙ひしめきあへば密語めき
桃の日の針箱の糸子らの色
母をよび娘を呼びて桜餅
ポタージュの黄色たつぷり日永し

○ 中里よし子

奥津城に安らぐ友やミモザの黄
雪来しと窓あけ見せてくれしかな
城址にものなの声さくら咲く
車椅子花の宴に加はりぬ
存らへて月のおぼろを待つ夜かな

○ 木村みどり

春シヨールたたみて香華供へけり
一条尻橋花冷の女かな
春深し父似の長き眉毛かな
亀鳴くや修養少し積みそこね
九条がありても怪し霾ぐもり

○ 池上昌子

公園に鶯の声仰ぎ見る
昨夜の雨溜まりて水の温みけり
青空に白蓮の芽のつんつんと
水草生ふ共に顔出す鯉のぬて
菜の花をすつきり生けて卓上に

○ 近藤真啓

ほつぺたに光るごろんこ葱坊主
囀やキャッチャーミットぽんと打つ
いつか飛立たねばならぬ巣箱かな
白球の影しづかなり卒業期
飽きもせずむかしの話さくら餅

○ 山下健治

むらさきの木蓮かをる真砂女の忌
甦る奈良二月堂お松明
病床の窓ごしひと本山ざくら
病むことも余生の慣ひ月おぼろ
清明や朝粥の白かがやきて

○ 小林紫乃

啓蟄や青竹踏みに余念なし
ネットで聞く校長講話卒業式
耳立てて草食む子牛水温む
喘ぎつつ上る山坂団栗の芽
大道芸の空中回転風光る

○ 山下朝香

白魚の透ける命を頂きぬ
声かけて雛に留守を頼みけり
強東風に結願の絵馬音たてて
咲満つも散るも優し花だより
桃の花もうすぐ母となる便り

○ 田中嘉信

釣竿の飛び交ふ池やうらけし
行く先を迷うてゐたる春の雲
母の手に甘ゆる幼花ミモザ
親しげに寄来る鳩や春愁
付度も屈託もなし雀の子

○ 室井津与志

ひなまつり唄うて逝きし妻哀れ
豊教院と呼ばれて妻の春の旅
奇跡てふ生命八年絶え彼岸
球場と土俵に躍る春の風
国技練る若隆景や春光る

○ 佐俣まさを

図書館の木椅子蛙の目借時
たんぼぼや野川の縁の六地藏
古民家に立つうすけむり松の芯
リュック負ふ児を先頭に花の山
白墨の虹は七色卒業す

山浦紀子

波を生む儒艮の欠伸春眠し
風呂釜の転がつてをり田螺鳴く
トーストの真つ黒こげや春の風邪
亜麻色の髪の乙女の立つ春野
反戦の旗の行進木の芽立つ

農野憲一郎

春宵や信号待ちに微パルファム
ゆきやなぎ佳人階より下り来
いま暫し春を悲しと含み酒
瞳る目が母娘春装花電車
つぎはぎの舞良戸がらり四月馬鹿

山本泰人

友ありし同窓会や春また来
蜆汁無心の孫の殻の山
吾子の背を門より送り梅香る
雪やなぎ行列で待つ芝居小屋
ボルゾイも吾も春眠のあと欠伸

横山さくら

古本の数の思ひ出春惜しむ
百千鳥木々の間より日の差せり
善き事の軌道を描け春の蝶
春色はどんな色かと問ふ少女
お手製の紙皿に乗す桜餅

余言

鈴木直充

雑巾とバケツ positioning 日永かな

近藤 牧男

どの家にも雑巾とバケツの備えはある。けれども、この常備品は主役ではないから、台所の隅などにひっそりと置かれている。家ぬちの其処此処の拭き掃除が終わった雑巾は、固く絞ってバケツの縁に掛けてあるのだろう。そこへ、めっきり永くなった日が届いている。

家の一隅の定位置に置かれた雑巾とバケツに焦点を当て、その存在をクローズアップしている。日常を見詰めて生まれた作品から、この家の人が日々の暮しを大切にしている心根が見えてくるのである。

鳥雲に婆の背中で育ちけり

小嶋 恵美

作者は大家族の中で育ったのであろう。往時、大方の家

の親は仕事に追われ、子育ては祖母にゆだねられていた。その婆もまた、幼少期に祖母に背負われて育ったにちがない。そして、代々唄い継がれてきた子守唄のあれこれを孫に聞かせ、眠りへといざなった。

春のある日、北方へ帰る渡り鳥の群れが雲間に消えんとしていた。そのとき、作者は「婆の背中」の記憶がよみがえってきたのである。記憶の中には婆の背中のぬくもりと子守唄のメロディが宿っている。

ミモザの香横切り逢ひに行きにけり 三宅 文子

春、ミモザが咲くと木が丸ごと黄色に染まる。けれども、ミモザの香は山梔子や百合の花のように官能的ではなく、ふわりと鼻先をかすめるような透明感のある甘さがある。さて、この句はミモザの妙なる香を横切って、すなわちミモザの誘惑を袖にして恋焦がれる人に逢いに行くというのだ。さながら、王朝の貴公子が矢も楯もたまらず姫君のもとに馳せ参じるシーンが浮かんでくる。いつの時代も、一途な恋は美しい。

木瓜深紅鉢の底抜く力かな

栗原 完爾

木瓜の読みの「ぼけ」は、いくぶん間延びしているけれども、春らしいのびのびとした語感がある。梅の花を大ぶりににしたような木瓜の花には、多様な色がある。この句、

鉢植えの深紅の花の木瓜が鉢の底から、根を思い切りはみ出していると詠んだ。力があり余って、根が「鉢の底抜く」ときつちり写生しているのである。

また、花の色がピンクやオレンジではなく、深紅一色に秘められたパワーが根に伝わり、鉢底を抜いたのであろう。作者は、この深紅の木瓜の一徹さに自身の克己心を重ねているようだ。

照返す蝌蚪の水田も近江ぶり

久保 久子

近江は琵琶湖を擁し、また豊かな湧水にも恵まれた水の国である。水は用水路をめぐって田圃に引かれる。水を湛えた田には無数の蝌蚪が生まれている。作者は、蝌蚪がゆらゆら泳ぐ水田を見つめ、水に指を入れたりして遊んでいる。蝌蚪を育てる近江の水は、春の日を浴びて温かろう。作者はおもむろに立ち上がり、水田から離れた。振り返ると蝌蚪たちが棲む水田が日の光を返している。「近江ぶり」の措辞から、鄙の水音が聞こえてきそう。

長らへて印税稼ぐ日永かな

廖 運藩

廖運藩さんは、春燈台北句会の指導者である。運藩さんには、九十三歳になられた今も印税が入ってくる。若い頃に著した本が、ずっと読み継がれているのだろう。愛読者が絶えないということは、この本が良書である証左だ。

運藩さんは、めっきり日が永くなった春の日に印税振り込みの通知を受け取ったのだろう。かつて自分が生んだ本が営々と印税を稼いでいる通知を手に感慨に耽っている。「長らへて」に感謝と自祝の意が籠められている。

たかだかと白き日輪春の雪

荒井 慈

立春が過ぎて、ようやく暖かくなったと思いきやゆくりなくも雪を降らせる日もある。春の雪は本気で積もるのではなく、地面に着地すると優く消えてしまう場合が多い。この句、雲裏の日輪が白く滲みながら輝いている。その日輪の在す明るい翳のある空から春の雪が舞い落ちてくるのである。銀色にまぶされた日輪が春の雪を産み、降らせているような夢幻の景を詠った作品である。

春昼や切らせてくれぬ猫の爪

木村 梨花

猫はよく爪が伸びるので、硬いものを引っ搔いて爪を研ぐ。しかし飼っている猫は爪を研ぐ本能が薄れて将もなく伸びる。春のうらかな日、作者は猫を抱っこして騙しだまし爪切りをした。けれども、猫はむしろ、切らせてくれない。抱き方を変え、肉球を撫でながら爪を出し、爪切りを当てるとスルリと足をすくめてしまう。でも、作者はちっとも焦っていないようだ。月に数回行う爪切りは、愛猫との濃密な触れ合いであり、至福の時なのだ。

当月集

鈴木直充選



○ 秋山 薫

春の月ふところ深くしまひたし
鍬の先丸くし老いる穀雨かな
言の葉の美しく菜の花蝶と化す
溪の音高まり来るや初桜
さざなみの湖へ傾るる山桜

○ 辻 泰子

囀や間口の広きジーンズ店
手作りの箸の工房彼岸入
断崖の向かうはのどか海青し
釣果あり春の海よりお裾分け
世界中に花のやすらぎ届けたし

○ 橋本雅代

衣の褪せ雖にもある齢かな
住み馴れてなほ迷ふ道芹の水
芽柳やシネマ帰りのカフェテラス
茎立や文字うすれたる道しるべ
ニュータウンひと回りして鳥帰る

○ 坂本依詠子

広大や姪の婚家の春菜畑
膨める草木のつぼみ風光る
学生ら昼前下校蝶遊ぶ
心中を見透かされさう白椿
桜餅「生き返った」と外交官

○ 小林文良

坂東や鎌倉殿と野に遊ばむ
鳥ぐもりおいてきぼりを食ひにけり
御包の葉ぐるみ食めり桜餅
雪柳浪裏高く暗れ深し
たちねのこ糸乗せ来り涅槃西風

春燈の句

鈴木直充選

囀や湯守の長き湯かき棒

東京 鈴木れい香

この花を母と思ひて今年また

漆喰の壁に花冷及びけり

春深し散葉包むオブラート

野に立ちてかげろふとなる白馬かな

花冷やうづら卵の茹であがる

てのひらに夕映と寄居虫をのせ

桜貝心の箱に仕舞ひけり

春や春八十路の朝の深呼吸

鶯や札状二行にて済ます

薪能般若にかかる花吹雪

ぜんまいの孤高の姿摘みにけり

何時の間に取りし齢や雛の日

初蝶に逢はんと歩く散歩道

東京 山口 地翠

京都 西村 洋平

埼玉 大谷満智子

夫の選ぶ春セーターの少し派手

マスクして歌ふ校歌や卒業す

雲ひとつ川面を過ぎて初桜

茶菓子取る懐紙の白さ花曇

沈丁の匂ふ夜陰の小糠雨

春愁を断つ決心や小海線

コロナ禍にかくれておはす難かな

月朧金婚過ぎの小旅行

玉椿ほとりと姉の逝きたまふ

花冷や泥棒坂てふ坂がかり

農道の浅き轍や春きざす

波音の舟屋の奥へ春日差

おてんばの影はいづこへ雛まつり

瀬の音のとどく湯宿のしづり雪

東京 原口 久恵

宮城 齋藤 久子

京都 大槻 祐二

